

図書館の現状

図書館長 片岡 義和

本校の図書館は、年間280日開館し、毎日平均延べ200～300人、年間約74,000人の学生の皆さんに利用されております。この内年間6,100人余りの学生に17,600点余りの本・雑誌・CD(内本・雑誌14,500冊)を貸出しており、これは年間本校の全学生(820人)が1人当たり21.4点(17.6冊の本)を借り出したことになります。この数字は全国の高専でトップレベルの数字ですが、反面図書館では静かに落ち着いて読書できないということにも繋がります。本校の図書館の広さは、閲覧室が332平方メートル(内書架部分200平方メートル)、マルチメディアコーナー48平方メートル、作業室23平方メートル、事務室32平方メートル、書庫72平方メートルの合計507平方メートルしかありません。また、本校の図書館の蔵書は、図書館内に、備品図書53,500冊、消耗品図書13,000冊、研究紀要4,200冊、研究用雑誌4,600冊、閲覧用雑誌2,700冊あり、外に教官研究室・共同研究室に15,500冊の合計93,400冊ほどの蔵書を有しております。この内約半数の45,000冊余りが閲覧室の開架書架に並べられております。古い本が目立つのは書庫に入れるべき本も、書庫が満杯のため書架に置かざるをえない実状からです。速いテンポでやってくるIT関係の技術革新の情報を網羅できるように各学科の先生方に最新図書の推薦をお願いし、毎年約1,800冊程度新しい本を購入しております。

「本・本屋・図書館」

電子制御工学科 湯浅 圖南雄

およそ学校と名がつくところには、図書館あるいは図書室がある。町にもあるし、会社にもある。本屋や図書館は、知識や興味の集積場所であると同時に、やすらぎの場でもある。私に限らず本好きにとっては、こうした場所がどこにでもあることは、いつでも憩いの一時を過ごせるオアシスがいつも近くにあるということである。

このような現状を踏まえ、図書館の環境を改善したいと検討を重ねてきましたが、学内の施設整備の長期計画に図書館が組み込まれていないことなどから、今すぐには改善できないことです。図書館委員会では閲覧室の拡充(学習スペースの改善・個人用学習スペースの確保)、独立したマルチメディアスペースの確保、視聴覚教材等を授業で使える部屋の確保などについて検討を加えてきましたが、図書館として使える面積に限りがあり、その殆どについて現時点で見通しが付かないことが判明しました。現在、もっとも必要に迫られている書庫について何とか増床できないか検討を加えていただいております。今年度旧学生課の部屋(139平方メートル)をいただき、書庫と閲覧室にあった本を、床の耐荷重の関係から一時保管しています。もし、現在お願いしている書庫を1階に造ることができれば、この部屋を有効利用したいと考えております。学生の皆さんが利用しやすい図書館を目指しておりますのでご要望等をお聴かせ下さい。



図書館や本屋にはいろいろ思い出がある。

小学1,2年の頃の思い出は、本屋の立読みとはたきである。年配の方はご記憶かと思うが、昔は、本屋ではよくはたきをかけて塵を払っていた。このはたきで本をパタパタたたいて、立読みの子供はよく追い払われた。私も、「小学一年」、「少年画報」などの子供雑誌を立読みして、よく本屋のおやじにはたきで追い払われた。でも、またすぐに舞い戻って本を開いて、はたきと、繰り返して、蠅の如く、しつこくまとわりついて、結局読んでしまうということをよくやった。昭和20年代の頃のことである。この本屋はまだ東京の東横線の祐天寺駅近くにあ

る。

小学生時代を通じて偉人伝を熱心に読んだ。「光をかかげた人々」、「郷土の偉人」といった本を感動をもって何度も読んだ。父が野口英世の伝記を書いた影響もあったのかもしれない。祖父は、昔、野口英世と机を並べて医学を学んだことがあり、その話をよく聞いていた医学者の父が思い立って終戦直後に伝記を書いた。母が清書して出版された、黒ずんだ質のよくない紙を使った、質素な装丁のその本は、今でも家の本棚にあり、両親を偲ぶよすがとなっている。

神奈川県藤沢市に移った小学高学年のある頃、家や学校の図書館にあったドリトル先生シリーズを読みつくし、新編を待望していた。ある日、新版を本屋でみかけて読み出し、数時間立ちつくして読み終わったところで、本屋の主人から坊やもういいだろうと声をかけられ、あまりもタイミングがよかったことと読後の満足感があまったせいか、いまだにその情景をよく記憶している。

この頃から中学にかけては、世界史の本に夢中で、図書館に行くのを楽しみにしていた。特に、古代史が面白くて、シュメール人の都市国家から始まるメソポタミア文明の発生などをわくわくしながら読んだことがなつかしく思い出される。関係する本はすべて読んでしまい、もっと詳しく知りたくてしょうがなかった。今のように町の図書館が充実していたら思いも満たされたであろう。

今も古代史にはロマンを感じる。近年の考古学の目覚ましい成果が次々に明かす新しい事実には本当に驚かされる。中でも、殷に先立つ夏の時代や三星堆(さんせいいたい)遺跡で知られる中国の古代揚子江文明の時代、日本の纏向(まきむく)遺跡と大和朝廷の成り立ちの関係が、次第に明らかになっていくことに、特に興味をひかれる。考古学の発見が一層進んで、邪馬台国の所在場所や神武天皇の時代、次の綏靖(すいぜい)天皇から始まる闕史(けっし)八代といわれる時代、崇神天皇の時代、応神天皇に続く河内王朝など、記紀の時代の真実が突き止められないかと果てしない期待を持っている。

高校、大学となると、図書館は専ら勉学のための場所となって、興味本位の本探しは公共の図書館ということになった。国会図書館に出かけたりして、探索の場を広げていた。

会社では、仕事のための文献利用が中心で、図書も専門書ばかりで、一般図書はあまりない

が、静かで干渉されることもなく、集中できる貴重な場所として図書室は価値があった。研究所であったので、論文を書いている人も多かった。新入社員の頃は息抜きの場所としてよく利用した。しばしば睡眠をとってリフレッシュした。起こされたこともある。勤務地毎にあった会社の図書室も、最近では集約され数少なくなってしまったようである。世相の反映か、電子化のせいか、いずれにせよ、書籍文化に対する価値の基準が変わってきているようで、残念な気がする。

SF作家のH.G.ウェルズ原作、孫のサイモン・ウェルズが監督となって、昨年上映された映画タイムマシンでは未来の図書館があらわれる。すべての図書内容は一人の映像人間に収められている。彼はディスプレイ中にいるが、閲覧者の質問に答えて、あらゆる情報を自在にしゃべり、コメントし、ジョークもとぼす。地球文明が月の落下により破壊され、原始の状態に戻った80万年後の世界で、彼だけは、破壊を免れ、過去の文明を伝える唯一の存在として、人類の教育にあたることになる。今、言われている電子図書館の1つの発展形態が100年前に既に描かれている。今もし、H.G.ウェルズが生きていたら、西暦2100年の図書館をどう夢みたであろうか。果てしない夢も、いつか現実となる。夢が夢であるときが楽しいのかもしれない。

